

閉会挨拶

愛知県がんセンター開設 50 周年記念国際シンポジウム実行委員長 青木正博

このシンポジウムを爽り多く盛会のうちに終えることができ、ご参加いただいた全ての皆様に、実行委員会を代表いたしまして心から感謝申し上げます。

化学療法・分子標的治療に対する耐性は、本来備わっている耐性、新たに獲得した耐性を含めて、基礎研究者、臨床研究者、あるいは橋渡し研究者である我々が現在直面し、そしておそらく近い将来においても直面しているであろう、重要かつ最も困難な問題の一つであることは明白であり、私どもがこの記念すべきシンポジウムのテーマとしてこのトピックを選んだ理由であります。

我々は本日、がんの薬剤耐性の様々なパラダイムについて、その根底にある基礎生物学から、将来のよりよい臨床対応を目指した薬剤耐性の新しい回避・克服戦略に至るまで、多くのことを学ぶことができました。

講演は全て非常に素晴らしく、ご多忙にもかかわらず私どもの招待を快諾していただき、海外あるいは全国各地からわざわざ名古屋までお越しいただいた演者の先生方に、改めて感謝申し上げます。そして勿論、北海道から九州まで全国からご参加いただいた 200 名を超える皆様に心から感謝申し上げます。このシンポジウムに来ていただき、そして終日活発に参加していただき、本当にありがとうございました。

木下総長が開会挨拶で申し上げました通り、愛知県がんセンターは、日本で 3 番目に古い総合がんセンターとして 50 年の長きにわたる輝かしい歴史を誇っております。諸先輩職員のハードワークによって得られたその名声に恥じぬよう、そして社会からの期待に添えるようにすることが、我々実行委員一同はじめ愛知県がんセンターの現職員全員の願いであります。我々はまた、このシンポジウムが今後のさらなる共同研究の展開に役立つことを願っております。

ここで、中央病院・研究所・運用部の混成チームである実行委員会の皆さん、そして様々な立場で本日のシンポジウム開催にご協力いただいたがんセンタースタッフの皆様に感謝の意を表すことをお許しください。

最後になりましたが、遠方までお帰りの方は安全で快適な旅となりますようお祈り申し上げます。

皆様、重ねて御礼申し上げます。では、50 年後にまたお会いしましょう！